

# アンコール・ワットは祇園精舎(?)だった

## ―宇宙観・巨大建築・華麗美術―

上智大学アジア  
文化研究所 石澤良昭

一、アンコール遺跡はどこにありますか

アンコール遺跡は現在のカンボジアの西北部シエムリアップ州に在り、トンレサップ湖西北岸一帯(別名アンコール地方)にある石造・レンガ造りの遺跡群を指す。それらはアンコール朝(八〇二―一四三二)の最盛期(十二―十三世紀前半)に建造された石造りの寺院・祠堂・貯水池・橋梁・宗教都城などである。そこはプノンペンから三―三キロのところの在り、特に

シエムリアップ市郊外には有名なアンコール・ワット、アンコール・トムなど主要な六二遺跡がある。その特色は規模の大きさ、巨大建築、華麗美術などで知られた東南アジア最大の文化遺産である。これらの文化遺産は当時の社会が創りだした構築物であり、その時代精神を凝集して、この遺跡研究を通じて往時の領域、政治・社会・宗教・技術・生活状況・宇宙観などが判明してくる。それは王朝の盛衰が遺構の増減と一致しており、繁栄した長期にわたる統

治は大遺跡の建立を可能にしている。

アンコール朝は神格化された王権を背景に富国強兵政策を掲げ、十二世紀から十三世紀初めにかけての最盛期には、その領域は現在のラオスのビエンチャンからタイ中部のスクータイまでの地域まで、西がチャオプラー川下流域、南がマレー半島北部まで、東がベトナム南部に及ぶ大版図であった。都城付近には約十五万人が住んでいたといわれ、一種の水利灌漑を基盤とした農村社会であった。水利網と大貯水池の建設は雨期の排水と、乾期の用水を円滑に行うための装置であった。

## 二、前アンコール時代は地方の時代

カンボジア史の時代区分ではアンコール時代に先立つ時代を「前アンコール時代（三世紀ごろ～九世紀初め）」と呼んでいる。日本という古墳時代から奈良時代にかけての時期にあた

る。前アンコール時代をさらに前半を扶南期、後半を真臘期にわけている。その前アンコール時代以前の時代には、メコン川デルタのカンボジア南部ではインド文化（稲作・儀礼・王権の考え方・武器・美術など）が受容され、自成的な土着社会が形成され、それがやがて扶南国として拡大していった。その外港オケオ遺跡からは、インド・西方世界からの渡来品（ローマ貨幣型コイン・仏像・ヒンドゥー神像・刻印入り護符など）および中国からの古い鏡などが出土している。六世紀後半のカンボジア南部のプノンダ遺跡からは大型のヒンドゥー教神像・仏像が発見されている。クメール真臘はもともとラオス南部チャンバサク地方に興ったらしく、数世紀かかってカンボジア中部の大平野部へ南下してきた。七世紀初めカンボジア中部のコンポントム地方ではイーシヤナプラ（「伊奢那城」）『新唐書』にイーシヤナヴァルマン（六一六

年登位」と名乗る王が統治していた。当時カンボジア各地には中小の地方拠点があり、小王が治めていたようである。メコン川のクラチュエ地方ではサンボール遺趾が見つかっているが、ここにも地方の小王がいたようである。

### 三、遺跡はみんな宗教建造物

アンコール遺跡はそのほとんどが宗教建造物である。寺院の建築様式から、基本的に二類型に分類される。基壇上に列状に配列された平面展開祠堂形式と、アンコール・ワットのような高塔堂をピラミッド状に積みあげた山岳寺院形式の二種類がある。前者は主として王の親者の墓を兼ねたもので、祖先を祀るのでこれを「祖寺」と呼び、後者は世界の中心寺院を表わす宇宙観に基づいているので「山寺」と呼んでいる。このピラミッド型山岳寺院は王権の神格化を演出するための道具であり、当時の人々が考えて

いる宇宙世界を地上に具現する目的で建設された。例えば、アンコール・トムには都城の中心にそびえ立つ高さ四五メートルのバイヨン寺院があり、そこは神々や仏が降臨する須弥山（メール山）を象徴したものであった。そこからは世界へ通じる東西南北に向けた基幹道路が走り、境内には天界と同じように諸寺院・僧院・王宮などが整然と配置されていた。その高い城壁・周壁はヒマラヤの霊峰に見立てられ、環濠は深い大洋を象徴していた。アンコール・トム都城は最初から外敵を防衛するために濠や城壁をつくったのではなかった。この宗教都城に必要な大道具は中心寺院・濠・貯水池・基軸道路・王宮・諸寺院であった。これら寺院の中央祠堂内では王と神が合体した特別な神（仏）像（神王）デヴァアーラージャ）が安置され、礼拝されていたという。

建築資材はアンコール時代初期にレンガと紅

土に砂岩を部分的に併用していた。十世紀頃から紅土と砂岩が主要建材となったが、浮彫りに漆喰を用いていた。しかしその扉や門は、まだ木造であった。砂岩を化粧石として使い、壁面にあの華麗な浮き彫り絵図や図像を彫り刻んでいた。十一世紀初めに建築技術の飛躍があり、ピラミッド型の高塔大型寺院が技術的に可能となり、そうした技術の改良がアンコール・ワットを十二世紀前半に実現させた。

#### 四、アンコール朝は建寺王朝であった

アンコール朝の初代王ジャヤヴァルマン二世（八〇二―八三四？）は各地を征服し、プノンクレーン丘陵（シエムリアップ市内から約四〇キロ）において王朝創始の諸儀式を執り行ったといわれる。このアンコールの地が以後約六〇〇年にわたり王都として存続する宗教的きっかけをつくった王である。三代目のインドラヴァ

ルマン一世（八七七―八八九）は、シエムリアップ市内から南へ十三キロのところにある都城ハリハララヤ（ロリュオス遺跡）を造営した。都城には中心山を模したバコン寺院（八八一）、祖先を祀るプリア・コー（八七九）、貯水池インドラタターカとその寺院ロレイ（八九三）がある。次に前王の息子ヤショヴァルマン一世（八八九―九一〇？）は小丘プノン・バケンの上に中心寺院プノン・バケンを建立し、一辺四キロの環濠を備えた大新都を造営した。以来この第一次ヤシヨダプラ（「ヤシヨヴァルマン王の町」の意味）がこの地域の名称となった。この王はラオス南部からシヤム湾まで遠征にでかけていた。その後国内が分裂し、ジャヤヴァルマン四世（九二八―九四二）がアンコールの北東九〇キロのところコー・ケーに新都をつくった。ラージエンドラヴァルマン王（九四四―九六九）は再びアンコールの地へ遷都し、国内を再統一

して、中心寺院プレ・ループ（九六一）と東バライ貯水池・東メボン（九五二）を建設した。その後平穏な時代が三〇年あまり続き、華麗な浮彫り絵図で有名な小寺バンテアイ・スレイが建立された（九六七）。ジャヤヴァルマン五世が一〇〇一年に逝去し、有力者三名が王位争奪戦を行ない、スールヤヴァルマン一世（一〇〇二—一〇五〇）が即位した。同王は王宮楼門およびピミアナス寺院・クレアン小寺群などを建立し、現在のタイ国のチャオプラヤ川流域まで支配下におさめたようである。続いて息子のウダヤディチイヤヴァルマン二世が一〇五〇年に登位して中心寺院バプオーンを建て、大貯水池西バライを開削した。

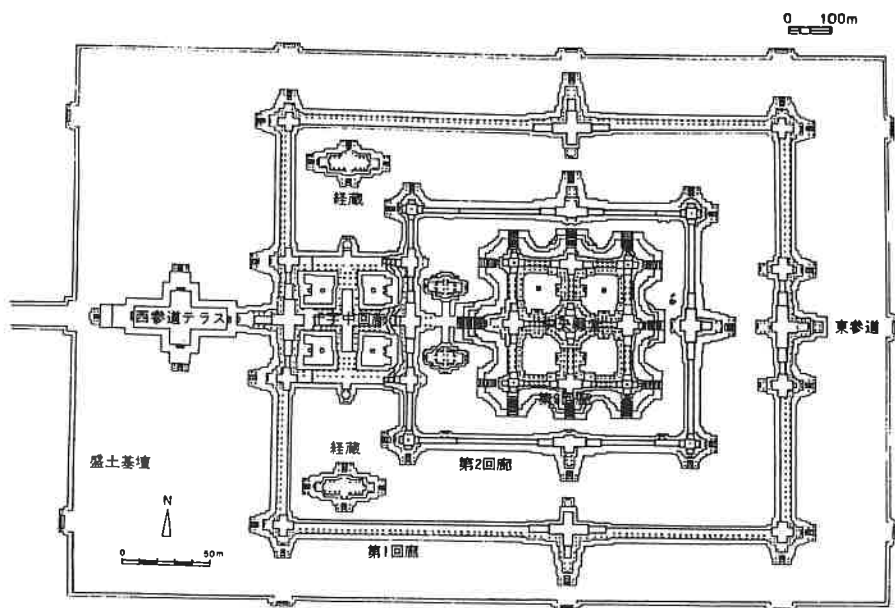
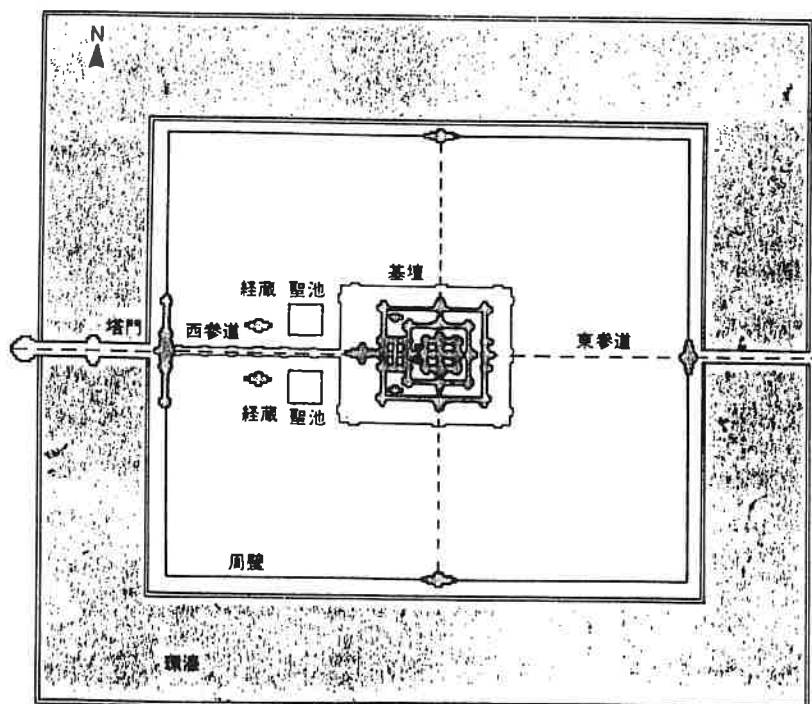
#### 五、高塔・大回廊・大階段のアンコール・ワット

一一一三年に即位したスールヤヴァルマン二世は、アンコール・ワット建設に着工し、約三

五年かかって完成させた。アンコール・ワットとはクメール語で「寺院のある町」の意味で、ヒンドゥー教ヴィシュヌ神に捧げられ、王の死後は墳墓寺院となった。この寺院は幅一九〇メートルの環濠が南北一・三キ、東西一・四キロの長さで取り囲んでいる。石畳を敷き詰めた幅一六メートルの西参道ではナーガ（蛇神）の胴体の欄干が続き、入口から外回廊まで五四〇メートルの参道が天界に通じる路のようにまっすぐ伸びている。さらに数キロに及ぶ大回廊がつながり、本殿には高さ六五メートルの中央塔を中心に5基の尖塔が天空に突き抜けるごとく峻立している。実際は西側が正式な参道であり、東側は建材等の搬入道路であつたらしく、土塁のまま残っている。建築学的な特徴は、大規模な高塔と大階段と長い回廊である。

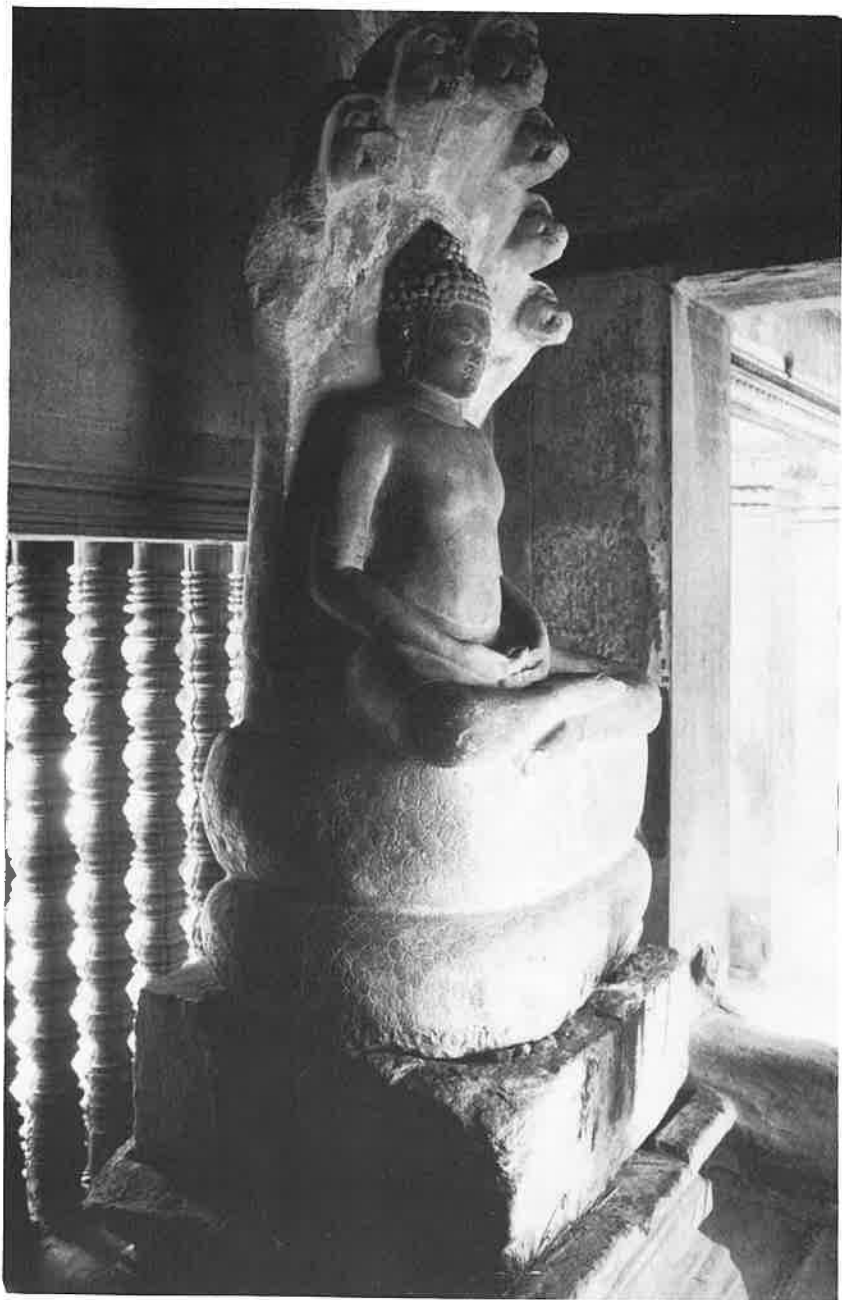
建築装飾では、大回廊内壁面に帯状に彫り込まれた薄肉浮彫り絵図、高塔堂の身舎頂上まで

アンコール・ワット配置図(上)と中央拡大図(下)



ラーマヤナのレリーフ (アンコール・ワット)







全壁面に施された巧緻な種々の文様、それに壁龕や堂塔四隅に刻まれたデヴァター（女神）立像浮彫りなど、どれも絢爛豪華な装飾である。

特に第一回廊（二〇〇メートル×一八〇メートル）内壁にはインドの叙事詩から挿話したラーマーヤナ物語・マハーバーラタ物語の絵図面が描かれている。また、王の歴史的絵図、天国と地獄の図、乳海攪拌の図、クリシュナと怪物バーナの戦闘図などが有名である。アンコール・ワットは十五世紀後半から上座部仏教の寺院に衣替えた。十字回廊などに仏像が多数奉納され、近隣住民の聖地として今も生き続けている。

十七世紀の朱印船貿易隆盛のころ多数の日本人がここを祇園精舎と考えて、参詣していた。十字回廊など十四か所に日本人墨書跡が確認できる。その年代は一六一二年から一六三二年までに及んでいる。その絵図面（祇園精舎の図）が水戸彰考館に残っている。なかでも森本右近

太夫一房（もと加藤清正家旧臣の子）が寛永九年（一六三二年）にアンコール・ワットを訪れ、父義太夫の菩提を弔うため仏像四体を納めたと記している。

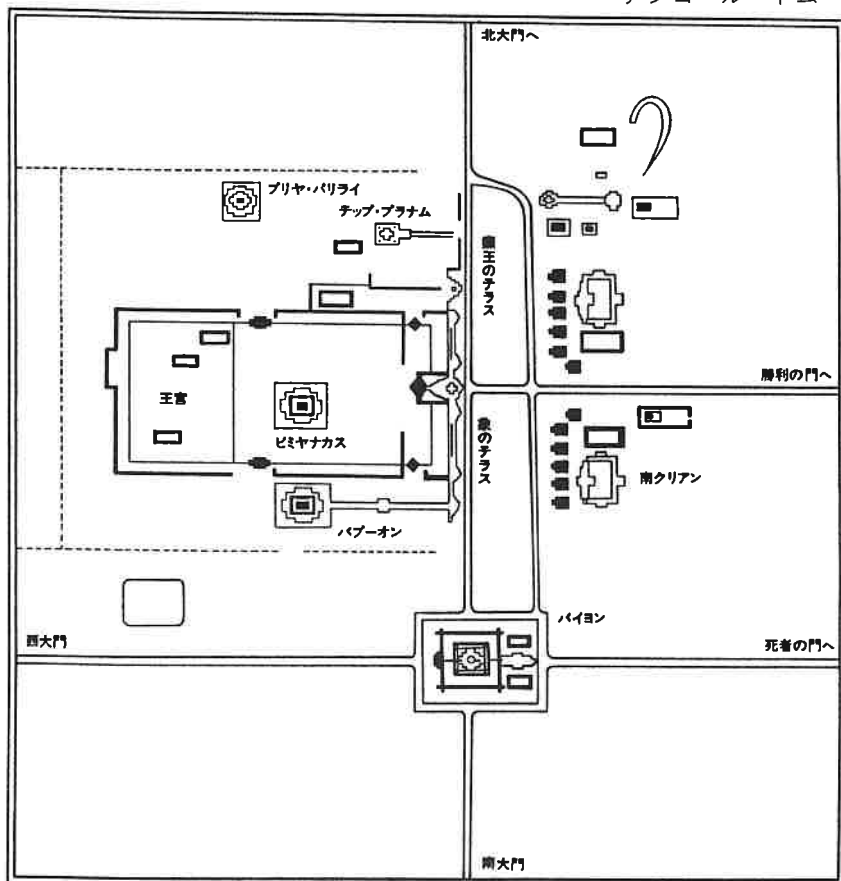
## 六、宗教都城アンコール・トム

スールヤヴァルマン二世は一一四五年ごろに行方不明となつてしまった。王位継承者は短命で、王位篡奪もあり国内政治が混乱していた。一一七七年にベトナム南部にあつたチャンパ国の軍隊がメコン川をさかのぼつてアンコール都城まで侵入し、王都を蹂躪した。

国内の混乱を収拾して一一八一年に即位したシャヤヴァルマン七世は、各地に一〇二か所の施療院と一一一か所の宿駅を建設した。その版図をインドシナ全域にまで拡大し、空前のアンコール大帝国を建設した。アンコール・トムとはクメール語で「大きな町」の意味で、ジャヤ

ヴアルマン七世が十二世紀末から十三世紀初めにかけて造営した宗教都城である。この都城は周囲十二キロの環濠に囲まれ、高さ八メートルの城壁と五つの城門を備えている。城内には中心寺院バイヨンがあり、他に王宮、諸寺院、祠堂、僧院などがある。城門の高さは二三メートル、その上部には王の篤信する観世音菩薩が飾られている。城門の前に幅一一三メートルの環濠にかかった陸橋を渡り、その両側にはナーガ(大蛇)の胴体で網引きをする五十四体の巨像が一列に並

アンコール・トム



び、一方がデヴァ（神々）で、他方がアシユラ（阿修羅）である。これらの巨人群はアンコール・ワット東面回廊浮彫りに彫られた「乳海攪拌」場面を立体的につくりあげたものである。城門は巨象・山車・牛車などが通り抜けられる。城扉は朝開かれ、夜閉じられたという。

## 七、大乘仏教の中心山バイヨン寺院

ジャヤヴァルマン七世は仏教に帰依していた。巨大な四面仏顔が塔頂に安置され、仏陀の慈悲が四周を照らすといわれている。この四面塔建築様式は世界に類のない独特の様式である。バイヨンの設計は二重の回廊を巡らせ、円形の中央本殿の上部に四面仏顔を高く積み上げている。その仏顔塔は高さ四五メートルに達し、さながら大きな岩石の山という観がある。バイヨンは建築中に何度かの設計変更があったらしく、複雑な構造となっている。寺院内部には動

物・植物の装飾文様が施され、破風・楣マシサなど随所に神仏を称えた浮彫りが彫られている。建築手法にも数多くの独創性が見られる。回廊浮彫りには、壁面にびっしり帯状の浮彫りが描かれ、その構図・手法・凶像・題材とも写実的であると同時に迫真性にあふれ、見ごたえがある。回廊南面には当時の庶民の日常生活が描かれ、アンコール軍とチャンパ軍の壮烈な戦闘場面も壮観である。城府内にはバプオン寺院（十一世紀）、王宮跡・象のテラス、テップ・プラナム寺院（十世紀初頭）、プリヤ・パリライ寺院（十二世紀前半）などジャヤヴァルマン七世以前の寺院や諸施設がそのまま残っている。

ジャヤヴァルマン七世の建築様式には、多く四面仏顔が配され、アンコール・トム城外ではタ・プローム（一一八六）、バンテアイ・クデイ（十二世紀末）、プリヤ・カーン（一一九二）、ニヤック・ポアン、タ・ソム僧院、バンテアイ・

南大門（アンコール・トム）前のナーガ（蛇神）の欄干



チュマール寺院など数百の寺院・僧院・施療院・宿駅を建設した。一二九六年に元朝使節の中国人周達観がアンコールを訪れ、その見聞録『真臘風土記』を著わし、当時のアンコール・トムの様子を伝える貴重な史料となっている。

#### 八、アンコール遺跡SOS

観光客はあの有名なアンコール・ワットやバイヨン寺院などの巨大な石造寺院に倒壊の危機が迫っているとは感じないかもしれない。内戦の被害は少なかったが、大量の雨水、大樹木の根、コウモリの糞など、自然の力による崩壊の危機は予想以上である事がわかった。実際に詳しく調査して見れば見るほど、あの荘厳な堂塔群もかろうじてそこに建っているだけであることがわかった。すでに倒壊した小建物や堂塔は、ここ五年以内に起こったものが多く、保存修復作業はまさに緊急の課題である。

カンボジアの人々はアンコール遺跡の保存修復の責任を自覚し、人的・財政的・物質的不足にもかかわらず、これまでできるかぎりの努力を傾けてきた。しかしながら、遺跡の規模の巨大さ、緊急に着手しなければならない遺跡だけでも二五か所あり、その緊急工事だけでも二〇年以上かかると推定される。二二年間放置されていたために、自然的人為的破壊が進み、倒壊の危機に直面しているのが現実である。上智大学では一九八〇年からアンコール遺跡調査・研究を開始し、アンコール遺跡の優れた世界的な価値とその損壊の危機的状況のデータを収集し、遺跡救済の緊急性を世界に訴えてきた。なぜ日本がアンコール遺跡の保存修復を手伝うかといえば、その優れた技術と人的貢献の可能性が高いこと、それがカンボジアに文化復興を導くこと、また、近隣のアジア諸国に日本の知的支援の事例と実績を示すよい見本となること

考えられる。

日本政府がアンコール遺跡のために百万ドル（ユネスコ信託基金の中から）供与する件は、カンボジアでこの三月十八日の朝のトップニュースとして伝えられ、現地には私たち調査団にまで確認の問い合わせがあったほど大きな反響があった。上智大学ではこれまで第七次までの調査団を派遣し、インベントリー（破壊状況カルテ）、考古発掘、建築、地質、保存技術、環境、社会経済、植物植生の八課題の調査を実施し、生のデータを集積してきた。これらの膨大な調査成果はアンコール遺跡全体のマスタープランの基礎資料になるものである。日本のアンコール遺跡保存修復への協力は地道で長い時間のかかる文化貢献であり、二一世紀に向けての最大の文化事業となるであろうし、日本が地球レヴェルで人間・文化・環境を掲げて行動する経済大国として、その文化協力の中味と実行力

が問われるところである。

### 「アンコール遺跡救済委員会」

一九九〇年七月、日本の官・民・財界の代表が集い、「アンコール遺跡救済委員会」が設立しました。アンコール遺跡修復の支援についてアンコール遺跡救済委員会事務局（上智大学アジア文化研究所内）までお問い合わせ下さい。

電話 〇三（三二三三八）四一三六

FAX 〇三（三二三三八）四一三八